

先天性脳性麻痺者の自己の障害に対する 心理過程の研究動向と展望

西田裕明*¹ 湯浅絢*² 武井祐子*²

要 約

本研究の目的は、障害のある当事者の「障害受容」や「障害認識」、「障害に対する意味づけ」に関する先行研究を概観し、障害種別にまとめを試み、事故や病気で後天性の障害を負い肢体不自由となった方や先天性脳性麻痺者が人生の中で自己の障害をどのように意味づけてきたのかを明らかにすることとであった。「障害 当事者 障害受容」の検索キーワードでJ-STAGEを用いて論文検索を行った結果、43件の論文が抽出された。2000年以降に障害のある当事者の障害受容に関する研究は多様な障害種に広がり、総数も大きな増加が見られた。また、事故や病気で後天性の障害を負い肢体不自由となった方の障害受容に関する論文と比べて、先天性の肢体不自由者の論文は少ないことが分かった。更に、後天性の肢体不自由者の障害受容は、Cohn や上田などの従来の障害受容論が適応できる結果となったが、先天性の脳性麻痺者では、障害を常態視しているなど、従来の障害受容論では説明のつかない、独自の障害受容過程があると示唆された。

1. はじめに

わが国は、2007年に特別支援教育が開始され、障害者基本法の改正や障害者総合支援法の成立、障害者差別解消法の成立および障害者雇用促進法の改正など、様々な法制度の整備を行い、2014年に国連障害者の権利条約（障害者の権利に関する条約：以下、権利条約）に批准した。それとともに、共生社会の実現に向けて、「インクルーシブ教育システム」(inclusive education system, 署名時仮訳：包容する教育制度)の構築が推進され、障害のある当事者の意思の尊重や合理的配慮など、当事者の視点に立った支援や当事者の意見を反映した教育環境の整備、各市町の障害福祉計画策定などが行われるようになった。例えば、医療的ケアが必要な児童生徒（以下、医療的ケア児）は、本人や保護者が希望すれば地域の幼稚園、小・中学校などに通うことが可能となり、在籍者数（幼稚園、小・中・高等学校）は2018年の974名から約500名増加し、2019年は1453名となっている¹⁾。この医療的ケア児の例のように、

当事者や保護者の意思や希望、身体的状態、心理的状态を反映し、合理的配慮を通常の小・中学校などで行うことが当たり前の社会となりつつある。

その一方で、障害のある当事者の障害受容過程（障害のある人が自らの障害をどのように理解、解釈していくかについての過程）における心理的体験の研究について生田と赤木²⁾は、蓄積がみられるものの、脊椎損傷、身体障害などの中途障害者を対象にした研究（例えば、垣³⁾；橋本⁴⁾）や障害児の親を対象にした研究（例えば、Drotar et al.⁵⁾；中田⁶⁾）が中心であると述べている。確かに、知的障害や言語障害を伴う障害の場合には、面接調査や質問紙調査を実施することが難しく、当事者の体験を明らかにしがたいという課題が挙げられる。しかしながら、知的な遅れや言語の遅れがない障害種についての障害受容の先行研究についても少なさが指摘されている²⁾。その1つが脳性麻痺の当事者である。

脳性麻痺（Cerebral Palsy：以下、CP）とは、旧厚生省脳性麻痺研究班の定義によると、「受胎から4

*1 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

（連絡先）西田裕明 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : nishida@mw.kawasaki-m.ac.jp

週間以内の新生児までの間に生じた、脳の非進行性病変に基づく永続的な、しかし変化しうる運動および姿勢の異常であり、その症状が満2歳までに発現するもので、進行性疾患や一過性の運動障害、または将来正常化するであろうと思われる運動発達遅滞は除外する^{7,8)}。日本国内の脳性麻痺者は、痙直型が8割、混合型が1割で、その他の障害型（アテトーゼ型、強剛型、失調型、無緊張型）が1割とされ、大半が痙直型とされている⁹⁾。知的能力や言語能力に障害が生じる場合もあるが、個人によって、知的能力が正常範囲である場合や、言語障害があっても早期の言語聴覚療法によって、会話が可能になる場合があると報告されている¹⁰⁾。

このような先天性脳性麻痺者にとって、障害がどのようなものであるか、つまり、個々人が自身の障害や困難さをいつ、どのように意味づけているのかを知ることは、当事者自身の自己理解や他者理解を深めるだけでなく、支援者や家族が障害のある当事者と関わる際にも必要な知識であるといえる。また、上述の先天性脳性麻痺者だけでなく、様々な種類の障害のある当事者の障害受容過程における心理的体験の研究について、障害種ごとに横断的に調査された研究はみられていない。さらに、先天性の肢体不自由者（脳性麻痺）と、事故や病気など後天性の肢体不自由者では、自身の障害や困難さの意味づけについて違いがあるのか比較した研究などもみられない。したがって、本研究では、障害のある当事者の「障害受容」や「障害認識」、「障害に対する意味づけ」に関する先行研究を概観し、障害種別にまとめを試み、事故や病気の後天性の障害を負い肢体不自由となった方や先天性脳性麻痺者が人生の中で自己の障害をどのように意味づけてきたのかを明らかにすることを目的とする。これらを明らかにできれば、肢体不自由者や脳性麻痺者の心理的理解および支援に役立てられると考えられる。

2. 方法

国内における障害のある当事者の障害受容過程における心理的体験の動向について明らかにするために、J-STAGEを用いて、以下の手順で論文検索を行った。まず、「障害 当事者 障害受容」「障害 当事者 障害認識」というキーワードで検索（1次検索）した。その際、検索対象期間は、特に設けなかった。検索された論文を読み、障害のある当事者の「障害受容」や「障害認識」、更に、それらと紐づけて解釈する際に用いられる「折り合い」「意味づけ」などのキーワードで論文を再度抽出（2次抽出）した。そして、抽出された論文について、(1) タイトル、

(2) 著者、(3) 雑誌・巻、ページ、発行、(4) 目的、(5) 対象、(6) 方法、(7) 結果という7つの観点から整理した。

3. 結果

3.1 対象文献数

検索キーワード「障害 当事者 障害受容」では、査読あり論文が241件検索（1次検索）された（2024年1月5日現在）。このうち障害のある当事者の障害受容に関係のない論文を除外した結果（2次抽出）、論文は43件となった。除外した論文の中には、障害のある当事者の家族（両親や母親、父親、きょうだい）についての障害受容の論文が35件あり、発達障害のある子どもの親の障害受容に関する論文が14件見られた。また、検索キーワード「障害 当事者 障害理解」では、査読あり論文が120件検索（1次検索）された（2024年1月5日現在）。このうち障害のある当事者の障害受容に関係のない論文を除外した結果（2次抽出）、論文は20件となった。この論文20件は、上述の検索キーワード「障害 当事者 障害受容」で2次抽出された論文と重複していた。そのため、以下に43件（このうち2件は複数の障害種（1件：先天性の視覚障害、先天性の聴覚障害、後天性の肢体不自由、1件：精神障害、autism spectrum disorder:以下、ASD）について書かれた論文であった）について整理した。障害種別の結果については、43件の論文の中に上記の2件が複数障害種の表記が見られたため、その3種類の障害を3件と数え、46件とした。

3.2 障害種別の検索結果について

検索された論文の種類を表1に示した。障害のある当事者の障害受容に関する論文は各障害種等に分類すると46件であった。障害種別の検索結果では、抽出された論文の結論から先天性の障害と、事故や病気など後天性の障害では、自身の障害や困難さの意味づけについて違いがみられた。そのため、同じ障害でも先天性と後天性に分けて整理することとした。その結果、視覚障害では先天性が1件、中途視覚障害などの後天性が3件、聴覚障害では人工内耳装用者などの先天性が3件、一側性難聴などの後天性が3件、知的障害では1件、肢体不自由では先天性が1件、事故や病気などの後天性が16件、精神障害では8件、自閉スペクトラム症では2件、筋萎縮性側索硬化症では1件、癌などによる咽頭摘出者では2件、失語症では2件、在宅酸素療法を受けている者では1件、膠原病では1件、トゥレット症候群では1件、計46件検索された。このうち、最も論文数が多かったのは、事故や病気などの後天性肢体不自由が

16件 (34.8%) であった。また、本研究の目的の「事故や病気で後天性の障害を負い肢体不自由となった方」と「先天性肢体不自由者 (本研究では先天性脳性麻痺者)」の自己の障害の意味づけを比較するために、「3. 4 後天性の肢体不自由の当事者における障害受容について」と「3. 5 先天性の肢体不自由

(脳性麻痺)の当事者における障害受容について」にまとめを試みた。

3. 3 各年代における各障害種等の論文数

次に年代別の検索結果を図1と表2に示した。論文数は、1990年～1999年が0件、2000年～2009年が12件、2010年～2019年が24件、2020年～2023年が10件、計

表1 検索された論文の種類

| 障害種等 | 文献 | 計 | (%) |
|-------------------|--|----|------|
| 視覚障害 (先天性) | 長谷川・米田 (2022) ¹¹⁾ | 1 | 2.2 |
| 視覚障害 (後天性) | 柏倉 (2005) ¹²⁾ , 坪田・安房・駿河 (2017) ¹³⁾ , 橋本 (2018) ¹⁴⁾ | 3 | 6.5 |
| 聴覚障害 (先天性) | 荒木 (2014) ¹⁵⁾ , 荒木・新井 (2017) ¹⁶⁾ , 長谷川・米田 (2022) ¹¹⁾ | 3 | 6.5 |
| 聴覚障害 (後天性) | 岡野・廣田 (2014) ¹⁷⁾ , 岡野・廣田 (2015) ¹⁸⁾ , 勝谷 (2019) ¹⁹⁾ | 3 | 6.5 |
| 知的障害 | 生田・赤木 (2021) ¹¹⁾ | 1 | 2.2 |
| 肢体不自由 (先天性) | 田垣 (2002) ²⁰⁾ | 1 | 2.2 |
| 肢体不自由 (後天性：脳卒中など) | 田垣 (2004) ³⁾ , 笹原 (2005) ²¹⁾ , 田垣 (2006) ²²⁾ , 松本・泉 (2007) ²³⁾ , 盛田・阿部 (2007) ²⁴⁾ , 井出・藤村 (2013) ²⁵⁾ , 井出・山崎・藤村・楠永 (2013) ²⁶⁾ , 北尾・鈴木・土井・清水 (2013) ²⁷⁾ , 林 (2018) ²⁸⁾ , 喜多・池田・仲渡 (2019) ²⁹⁾ , 北村・宮本 (2019) ³⁰⁾ , 志戸岡・内藤 (2019) ³¹⁾ , 関 (2020) ³²⁾ , 佐久間・小澤 (2021) ³³⁾ , 長谷川・米田 (2022) ¹¹⁾ , 金原・笹田 (2023) ³⁴⁾ | 16 | 34.8 |
| 精神障害 | 半田・日下・叶谷・佐藤 (2004) ³⁵⁾ , 齋藤 (2009) ³⁶⁾ , 池谷 (2013) ³⁷⁾ , 御旅屋 (2017) ³⁸⁾ , 瀬戸口・糸嶺 (2017) ³⁹⁾ , 瀬戸口・糸嶺・朝倉・鈴木 (2017) ⁴⁰⁾ , 瀬戸口・糸嶺・町田・鈴木 (2018) ⁴¹⁾ , 前原 (2019) ⁴²⁾ | 8 | 17.4 |
| 自閉スペクトラム症(ASD) | 御旅屋 (2017) ³⁸⁾ , 平野 (2022) ⁴³⁾ | 2 | 4.3 |
| 筋萎縮性側索硬化症(ALS) | 隅田 (2010) ⁴⁴⁾ | 1 | 2.2 |
| 咽頭摘出者 | 辻・間瀬・寺崎 (2008) ⁴⁵⁾ , 間瀬・寺崎・辻 (2009) ⁴⁶⁾ | 2 | 4.3 |
| 失語症 | 能智 (2006) ⁴⁷⁾ , 吉畑 (2018) ⁴⁸⁾ | 2 | 4.3 |
| 在宅酸素療法を受けている者 | 工藤 (2022) ⁴⁹⁾ | 1 | 2.2 |
| 膠原病 | 岡本・石田 (2023) ⁵⁰⁾ | 1 | 2.2 |
| トゥレット症候群 | 松田 (2013) ⁵¹⁾ | 1 | 2.2 |

注) このうち2件は複数の障害種【長谷川・米田¹¹⁾：先天性の視覚障害・先天性の聴覚障害・後天性の肢体不自由, 御旅屋³⁸⁾：精神障害・ASD】について書かれた論文であった。

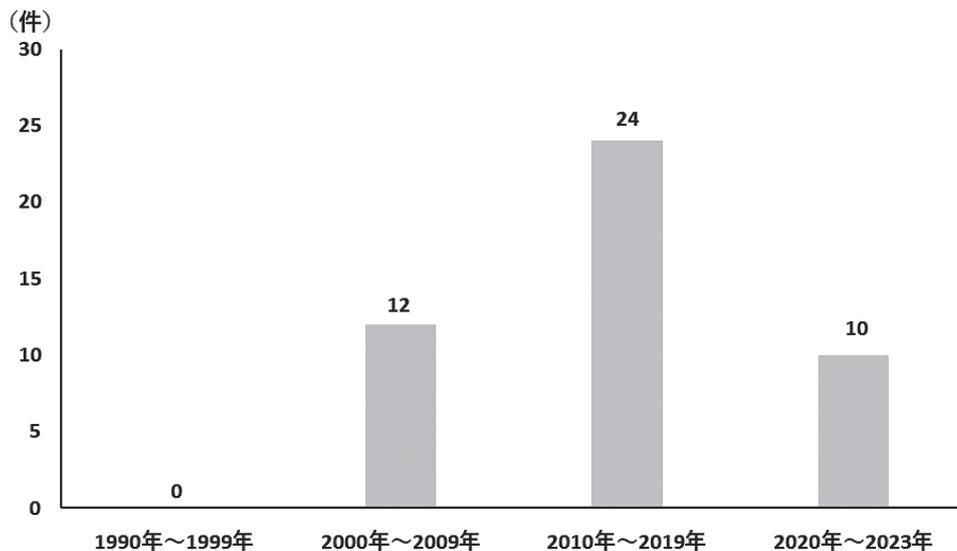


図1 各年代における障害のある当事者の障害受容に関する論文数

表2 各年代における障害種別等の論文数

| 障害種等 | 年代 | 1990年～ 1999年 | 2000年～ 2009年 | 2010年～ 2019年 | 2020年～ 2023年 | 障害種別の 論文の合計 |
|------------------|----|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|
| 視覚障害（先天性） | | | | | 1 | 1 |
| 視覚障害（後天性） | | | 1 | 2 | | 3 |
| 聴覚障害（先天性） | | | | 2 | 1 | 3 |
| 聴覚障害（後天性） | | | | 3 | | 3 |
| 知的障害 | | | | | 1 | 1 |
| 肢体不自由（先天性） | | | 1 | | | 1 |
| 肢体不自由（後天性：脳卒中など） | | | 5 | 7 | 4 | 16 |
| 精神障害 | | | 2 | 6 | | 8 |
| 自閉スペクトラム症(ASD) | | | | 1 | 1 | 2 |
| 筋萎縮性側索硬化症(ALS) | | | | 1 | | 1 |
| 咽頭摘出者 | | | 2 | | | 2 |
| 失語症 | | | 1 | 1 | | 2 |
| 在宅酸素療法を受けている者 | | | | | 1 | 1 |
| 膠原病 | | | | | 1 | 1 |
| トゥレット症候群 | | | | 1 | | 1 |
| 各年代の論文の合計 | | 0 | 12 | 24 | 10 | 46 |

注) 単位は、件

46件検索された。1999年以前の論文は1件も見られなかったが、2000年以降に障害のある当事者の障害受容に関する研究は多様な障害種に広がり、総数も大きな増加が見られた。

3.4 後天性の肢体不自由の当事者における障害受容について

先行研究で最も多く見られたのが、事故や病気の後天性の障害を負い肢体不自由となった方を対象とした障害受容に関する論文（16件）であった。このうち1件は先天性の聴覚障害や視覚障害の大学生（各2名）とともに、高校時代に受傷し、肢体不自由となった大学生1名の障害受容について書かれた論文¹¹⁾であった。この論文¹¹⁾は、先天性の障害についての表記の割合が大きかったため、次の表3の「肢体不自由（後天性：脳卒中など）の当事者における障害受容の先行研究」では除外し、表4の「先天性の肢体不自由（脳性麻痺）の当事者における障害受容について」に表記することとした。

表3は、肢体不自由（後天性：脳卒中など）の当事者における障害受容の先行研究を7つの観点から整理し、表示した。15件の論文の目的は、当事者の障害の受傷から障害を受容していく過程における心理的体験の動向について明らかにするものが多く見られた。対象は、脳卒中や高次脳機能障害などの脳血管障害者が7件、頸椎損傷者が3件、脊髄損傷者が

6件で、年齢は10歳代から70歳代と様々であった。研究方法では、インタビュー調査を行い、得られたデータを質的に分析した論文が13件、脳卒中当事者である著者自身の語りをまとめた論文が1件、Web調査と質問紙調査から得られたデータを統計解析ソフトで分析した論文が1件であった。結果では、事故や病気や障害を負ったことによる「痛み」や「苦しみ」「葛藤」「負の感情」などの表記が多く見られ、家族や妻の支えや他者とのかかわりなどを通じて時間をかけて、「対処行動」を見つけながら自身の障害と向き合っていく姿が多く論文で見られた。また、高次脳機能障害者は「障害を受容も拒否もしないまま、いくつかの課題に立ち向かいながら生きている」と言え、＜受容なきままの覚悟＞をもって生きる存在として認識することができる²⁸⁾と述べられ、受容と拒否の間で揺れながらも、困難な場面に取り組む様子がうかがえた。

3.5 先天性の肢体不自由（脳性麻痺）の当事者における障害受容について

表1と表2から、先天性の肢体不自由の当事者における障害受容に関する論文は田垣²⁰⁾の1件のみであった。この1件の論文だけで先天性の肢体不自由の当事者における障害受容をまとめることは難しいため、著者と研究参加者2名で協議し、再検索にふさわしいキーワードを「肢体不自由 障害受容」「脳

表3 肢体不自由（後天性：脳卒中など）の当事者における障害受容の先行研究

| No. | タイトル | 著者 | 雑誌、発行、巻、ページ | 目的 | 対象 | 方法 | 結果 |
|-----|---|----------------------------|------------------------------------|--|---|---|---|
| 1 | 中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか：脊髄損傷者のライフストーリーより | 田垣正晋 ²⁾ | 社会心理学研究, 2004年, 19巻, 3号, 159-174. | ①各生活パターンの変化の中で、障害への意味づけの長期的な変化プロセスを明らかにし、②その結果、現状において、生活の肯定的側面と、障害に伴う不利益はそれぞれどのように意味づけられているのかを検討すること | 中途重度肢体障害者10名(外傷性脊髄損傷) (28歳～52歳) | 半構造化面接を実施し、KI法で分析 | 本研究の対象者は、「現状は良くなくなった」と共に意味づけていると考えられた。また、障害者とのかわりかかわりが問題の解決に寄与したと語っている。関係性への意味づけは、かわりかかわりとなる障害者の障害の種類や程度によって異なっている。同種の障害者である脊髄損傷者とのかわりかかわりは、不治の判明の衝撃や自宅療養中の「ストレス」といった否定的な状況からの立ち直り、あるいは機能回復の契機等、自身が抱える問題に直接的に寄与したと意味づけられている。中途障害から生じる問題は、長期的なプロセスからとらえることの有効性が明示された。 |
| 2 | 脳血管障害をもつ壮年期の人々の在宅生活に関わる願望の内容 | 笹原千穂 ²¹⁾ | 日本地域看護学会誌, 2005年, 8巻, 1号, 24-30. | 壮年期にある脳血管障害者の在宅生活に関わる願望を具体的に明らかにし、地域生活を支援するための看護上の示唆を得ること | 脳血管障害患者10名 (30～50代) | インタビュー調査を行い、得られたデータをカテゴリー化し、帰納法的に分析 | 【良くならない】【夜に立ちたい】【趣味・得意なことをしたい】【自由に外出したい】【情報があふれる】【サービスへの意見・提言】というカテゴリーが抽出された。本研究の対象者は、ADLがほぼ自立している者が多かったが、次のような示唆が得られた。(1)願望の内容は共通していたことは、自分も主体的に何かをしていきたいということであった。(2)願望の内容は発症前から好きだったこと、得意なことに関連して語られる場合が多かった。(3)願望の内容は個別性が高く、また既存のサービスだけでは対応できない願望もあった。今後は願望の実現に向けて当事者とともに支援方法を検討していくことが課題と考えられた。 |
| 3 | 障害の意味の長期的変化と比較研究 脊髄損傷者のライフストーリーより | 田垣正晋 ²²⁾ | 質的心理学研究, 2006年, 5巻, 1号, 70-98. | 脊髄損傷者のライフストーリーから、受障期間の長い者と短い者における、障害の意味づけにどのような違いがあるのかを検討すること | 受障期間が15年以上になる脊髄損傷者(以下、長期)10名と、7年以内の脊髄損傷者(短期)14名 (32歳～52歳) | 半構造化面接を各行い、KI法を参考に分析 | 第1に、受障期間が長くなるにつれて、肯定的意味づけの内容および比較対象が増え、さまざまな生活文脈を生きて行くにつれて、意味づけも複雑になると考えられた。第2に、受障期間が長い者が、受障しない場合の自己を基準にして、現状の肯定的側面を語る傾向があった。肯定的意味づけは、受障前の自己だけではなく、受障しない場合の自己を基準とする方が、障害との因果関係が顕著になると考えられた。第3に、障害に伴う不利益の特徴としては、長期、短期の話し手双方が、機能障害、能力障害および社会的不利であると語った。第4に、長期の話し手には、受障後の生活のプロセスの準備をいっただん見直して修正する意味づけがあった。第5に、受障期間が数年以上の人に見いだされた特徴として、障害者と健常者との間に区分がないとすると意味づけがある。以上から、受障期間が長くなるにつれて、話し手は新たな不利益に遭遇しながらも、新しい肯定的意味づけを見いだしたり、1つの肯定的意味づけを多面的にしているといえる。 |
| 4 | 脊髄損傷患者の急性期における体験 | 松本浩子, 泉キヨ子 ²³⁾ | 日本看護研究学会雑誌, 2007年, 30巻, 2号, 77-85. | 脊髄損傷患者が急性期にどのような体験をしているのかを明らかにすること | 回復期リハビリテーション病棟に入院している脊髄損傷患者6名 (10代～70代) | 半構造的面接を行い、質的帰納的に分析 | 急性期において、脊髄損傷患者には、損傷による激しい身体の痛みが生じていた。また、他者のペースに依存しなければ生活動作ができないという悩みを抱え、家族内における自分の役割を放棄していた。医療者に対して感謝の気持ちや信頼感をもつ一方で、理解してくれないという不安や失望など相反する思いをもっていた。そして、自分が生きていることを喜んできてくれた家族や友達、残存能力を認められる看護師の存在が生きている希望につながっていた。これらから、身体の痛みや他者に依存しなければならぬという悩みを理解し、脊髄損傷患者が生きている意欲をもてるよう関わりについての看護介入の視点が示唆された。 |
| 5 | 中途身体障害者の心理的回復過程におけるライフストーリー研究：個人的・社会的側面による仮説的モデル生成の試み | 盛田祐司, 阿部真里子 ²⁴⁾ | 質的心理学研究, 2007年, 6巻, 1号, 98-120. | 中途身体障害者の語りから、本人の体験を個人的側面・社会的側面の両面から考察すること | 中途身体障害者2名(高次脳機能障害者)4名(30代前半), 疾病による脊髄損傷者1名(20代後半) | 徳田(2004)が定べるライフストーリー・インタビューの方法論を基本として質問した | 身体障害者の心理的回復においては、「身体的つながり」と「対人的つながり」が重要であることが見いだされた。さらに、その回復過程を表す仮説的モデルとして、「相互作用モデル」と「死と再生モデル」を示した。 |

| No. | タイトル | 著者 | 雑誌, 発行, 巻, ページ | 目的 | 対象 | 方法 | 結果 |
|-----|--|-------------------------------------|---|---|--|--|---|
| 11 | 理学療法を積極的 に取り組んでいる 障がい者有した働 き盛りの患者の理 学療法への取り組 みに対する意欲を 探求する | 喜多一馬, 池田 耕二, 仲渡一真 ²⁹⁾ | 保健医療学雑誌, 2019年, 10巻, 2号, 79-91. | 障がいを有した働き盛りの 患者の理学療法への取り組 みに対する意欲を向上させ るための知見を得ること | 入院患者 (就労中) 患者を ベイルトし, 半構造面接を行 った。テーマは, 半構造面接 をこなす意欲等が示された。 我々は, これらに着目した理 学療法実践時の声かけや配慮, 工夫が理学療法への取り組 みに対する意欲の向上に大 切になると結論づけた。 | 解釈学的現象学的分析と 本患者の理学療法への取り 組みに対する意欲を9つのテ ーマから解釈することがで きた。テーマは, 半構造面接 をこなす意欲等が示された。 我々は, これらに着目した理 学療法実践時の声かけや配 慮, 工夫が理学療法への取 組みに対する意欲の向上に大 切になると結論づけた。 | |
| 12 | 慢性期脊髄損傷者 の排便形態と便秘 の有無が自尊心 と自己効力感に 与える影響 | 志戸岡 基子, 内藤直子 ³⁰⁾ | 日本看護技術学会誌, 2019年, 18巻, 26-35. | 慢性期脊髄損傷者の排便 形態と便秘の有無が自尊 心と自己効力感に与える 影響を明らかにし, 看護ケ アへの示唆を得ること | 慢性期脊髄損傷者 (準期) 者114人 (平均年齢46.2 歳) | Web調査と質問紙調査を 実施。得られたデータを 統計解析ソフトIBM SPSS Statistics (Ver. 22.0) を使用し, 分析 | 慢性期脊髄損傷者の排便形 態と便秘の有無が自尊心と 自己効力感に与える影響を 与えていることが自尊感情 に影響を与えていた。 慢性期脊髄損傷者は, 便秘 の有無が自尊心と自己効力 感に影響を与えていた。 慢性期脊髄損傷者は, 便秘 の有無が自尊心と自己効力 感に影響を与えていた。 |
| 13 | 私の障害受容一途 症10年目を過ぎた 脳卒中当事者とし て今思うこと一 | 岡啓子 ³²⁾ | The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 2020年, 57巻, 10号, 920-929. | 本論は2019年第56回日本リ ハビリテーション医学会に おける教育講演「障害受 容」に登壇したスクリプト 全員に依頼された原稿をま とめたものうち, 脳卒中当 事者の語りを整理したもの | 脳卒中当事者 (現在60代後半) | 発症後「10年」の節目 を越えた慢性期脳卒中当 事者 (ST) である自身 の体験を語りの中から整 理 | 高次脳機能障害は専門家と して「知識・精進・意識」 のおかげで大半は 早期に消失し, 現時点では 利き手である左上肢の麻痺 と軽度の発語障害が残存し ている。発症時, 自分が負 った障害に対して筆者は悔 しい, 寂しい, 腹立たしい, などの負の感情を抱いた一 方で, 前向きな感情もあつ た。脳卒中としての経験か ら, 当事者は自分の障害を 残りの人生をかけて負わね ばならないことを筆者は知 っており, 過去の経緯と考 え併せ, 今後自分の経験 を語ることに by 他者に貢 献することと自分の役割と 判断し, 発症直後から音 声, 動画, 日記などで経 験を記録し書籍2冊にまと めた。 |
| 14 | 頸髄損傷者の社会 との関わり合いを 形成するプロセ ス: ソーシャルメ ディアに焦点をあ てて | 佐久間 穂子, 小澤 温 ³³⁾ | リハビリテーション連携 科学, 2021年, 22巻, 1号, 12-22. | 頸髄損傷者がリハビリテ ーション施設での生活を 経て地域に戻り, ソーシ ャルメディアを通して社会 との関わり合いを形成す るプロセスを明らかにす ること | 受傷歴10年以上の 頸髄損傷者10名 (20代~30代) | 面接調査 (必要に応じて 電話等を通しての調査) を行い, 修正版グラウン デッド・セオリー・アプ ローチを用いて分析 | 頸髄損傷者はソーシャル メディアによって閉じた 社会の入り口を開けるこ とと同時に, 《同級生との 比較において生じる苦し み》を経験している。こ れらの生じた苦しみが消 えることではないが, 《“ 健康者” と “障害者” の 壁への気づきのなかで 【 “健康者” と “障害者” の意見の相違点】を繰り 返す, ソーシャルメディア の活用》に至る。つまり, ソーシャルメディアは, 社会 との関わり合いに困難を 抱える者への一助になり 得るといえる。 |
| 15 | 脳卒中により半身 麻痺となった女性 がファッション ショーを通して障 害の捉え方が変化 していく心理プロ セス | 金原衣理子, 笹田 哲 ³⁴⁾ | 質的心理学研究, 2023年, 22巻, 1号, 369-387. | 脳卒中により半身麻痺と なった女性が, ファッ ションショーへの参加 をきっかけに, どのような 心理・行動が変化したの かを明らかにすること | 脳卒中者4名 (40代~50代) | 半構造化面接を行い, 複数経路・等質性ア プローチ (trajectory Equifinality Approach; TEA) を用いて, 個々の 対象者の経路の多様性を 描いた | 対象者は脳卒中の発症 により, 洋服は「着られ ばよいもの」となり, 周 囲からの視線にネガティ ブな感情を抱いていた。 前向きな障害者との出 会いがファッション ショーへの参加を決意 するきっかけとなり, 準 備期間には他の参加者 との関係性の中で自己 を見つめ直し, 障害者 であることに対し意味 を「開き直る」【 “吹 切れた” 経験をした者 もいた。そして, 本番 当日にはヘアメイクと 衣装で華やかに披露 し, 様々な思いを胸に ランウェイを歩いた。 本番終了後にはお洒落 の楽しみ方が変化し, 家族や仲間と新たな つながりたことに挑戦 する中で (一人じゃない と思う) ことができ, 周囲からの視線が抑 圧的に働かなくなり ていた。最終的には, 障 害があるからこそ得 られた自身の経験を 活かす, 同じように 関心している人々の ために活動を実践し ていくことが示唆され た。 |

表4 先天性の肢体不自由（脳性麻痺）の当事者における障害受容の先行研究

| No. | タイトル | 著者 | 雑誌, 発行, 巻, ページ | 目的 | 対象 | 方法 | 結果 |
|-----|---|---|--|---|--|---|--|
| 1 | 生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味 一重度肢体障害者と健常者との狭間のライフストーリーより一 | 田垣正晋 ²⁰⁾ 池田浩明, 広川律子 ²⁰⁾ | 質的心理学研究, 2002年, 1巻, 1号, 36-54. 藤女子大学QOL研究所紀要, 2012年, 7巻, 1号, 67-75. | 「軽度」肢体障害者における障害の意味づけについて、生涯発達の観点から、健常者中心の環境における困難と、障害を持つ他者との関係性に焦点を当てて検討すること | 一般就労をしている脳性麻痺の対象者3名(26歳と30歳, 35歳) | 半構造化面接を行い、面接で得られた各ライフストーリーを、「通時的変化」と「現状」という時間枠から分析 | 自己と障害との関係の変化プロセスが語られた。それは「障害を常態視」→「脱価値的な体験への対応」→「障害を自己の中心に位置づける」というものだった。また、対象者は、障害の種類や程度に基づきながら、障害を持つ他者と同種意識を持っていた。さらに、健常者中心の環境における困難とは、障害が他者に伝わりにくいのがゆえに、配慮を受けにくいことだった。このため場合によっては、介助を必要とする際、「軽度」肢体障害者は「障害の呈示のジレンマ」に陥ることが考察された。 |
| 2 | 言語障害を伴う脳性麻痺者の長期予後に関する研究(1) 一言語機能と障害認識の面から一 | 鈴木真知子, 池田浩明, 広川律子 ²⁰⁾ | 藤女子大学QOL研究所紀要, 2012年, 7巻, 1号, 67-75. | 言語障害を有するアテトーゼ型脳性麻痺者に、面接調査を実施し、言語障害などを話しめとする自己の障害認識について明らかにすること | アテトーゼ型脳性麻痺者8名(25歳~49歳)。知的には境界線から正常範囲の者、かつ、後期中等教育以上を受けた者に限定。 | 面接調査を実施し、その内容を質的に分析 | (1) 8名全員が現在もリハビリテーションを受け、加齢による障害の重度化は、それほど進行してなかった。しかし、幼少期のリハビリテーションは「痛かった、辛かった」という思いが強く残っており、保護者の強い期待のもと歩くことを目標にひたすら努力した。 (2) 8名中6名が幼少期の言語療法の内容を記憶していなかった。一方で、コミュニケーション場では差別やいじめを受けたりした記憶は現在も強烈に残っていた。しかし、現在は粘り強く具体的対処をしていることも明らかになった。 (3) 全員が何らかの社会参加をしており、これらが各自の言語能力の発達を促してきた。 (4) 精神面での成熟度という観点からみると、これまでの成長過程で親と葛藤がなかった、反抗期がなかったと返答した人が半数以上いた。 (5) 自己の障害に気づいた時期は、3, 4歳が多かった。気づきのきっかけは「歩くことができなかった」という点であった。兄弟の発達と比較し、自分の障害に気づいたことも多かった。本研究の対象者は、言語障害や運動機能障害を客観的に認識したうえで受容し、日常生活では、様々な困難はあるが工夫しつづ、真摯に向き合い努力している姿勢が見られた。 |
| 3 | 言語障害を伴う脳性麻痺者の長期予後に関する研究(2) 一言語機能と障害認識の面から一 | 鈴木真知子, 広川律子 ²⁰⁾ | 藤女子大学QOL研究所紀要, 2013年, 8巻, 1号, 67-76. | 今回は、前回の調査内容を踏襲し、対象者を増加し、言語障害を有するアテトーゼ型脳性麻痺者に、言語障害などを話しめとする自己の障害認識について検討すること | アテトーゼ型脳性麻痺者10名(27歳~59歳)。知的には境界線から正常範囲の者、かつ、後期中等教育以上を受けた者に限定。 | 面接調査を実施し、その内容を質的に分析 | (1) 対象者のリハビリテーションが比較的良好に継続されている事は、特記すべきことであり、しかし、運動機能の低下がみられ、歩行が不可能になったケースや思春期以降に心身症を発症した者がいたケースもある。 (2) 自己の障害覚知については、ほとんどが「独歩出来ない」ということが主であり、それによって、自己の言語障害について幼少時に自覚していた者は少数であった。 (3) 彼らの運動機能が、20歳前後に落ちているのに対して、言語機能は落ちていなかった。また、彼らはPT が苦痛を伴うものと記憶しているのに対して、ST を「楽しかった」と受け止めている者が多かった。 (4) 10名のうち5名が、AACなどの代替手段を補助的あるいは全面的に使用していた。本調査では、年齢層が前回より高いためか、生活環境や社会経験の制約による会話内容の未成熟さが目立った。また、現時点では言語障害や運動機能障害を受容しているものの、思春期前後に運動機能の退行や精神症状などを体験した者が一定数いたことが明らかになった。 |
| 4 | 自己受容に悩むアテトーゼ型脳性麻痺児に対する読書を通じたかかわりに関する事例研究 | 小西一博 ²⁰⁾ | 教育カウンセリング研究, 2020年, 10巻, 1号, 11-18. | 学校教育現場において自己受容に悩むアテトーゼ型脳性麻痺児に対し読書を通じたかかわりによる支援をすることで、対象児にどのような心理的変化がみられるかについて検討すること | 小学3年生のアテトーゼ型脳性麻痺児(9歳) | 支援期間中に得られたエピソード記録をもとに、読書を通じたかかわりによって、みられた対象児の心理的変化過程を記述し、分析した | 対象児は当初、移動機能障害を抱えている自分を受け入れることができず、自由に歩くことができる友達のようになりたいと羨んでいた。そのため、自分のよさを見出すことができずになっていた。しかし、読書を通じたかかわりを継続することで、他者と比べながら自分のよさを発見することができた。そして、次第に他者と比較せずに自分なりによさを見つけられるようになり受容した。最終的には、憧れる友達のようになる必要性がないことになり、ありのままの自分を受け入れるようになっていった。さらには、自分がこの世に生を受けた意味についても、自分なりの答えを見出し、自分のよさを大膽に示すという姿勢が見られるようになった。 |

性麻痺 障害受容」に決定し、その検索キーワードを J-STAGE や CiNii, Google Scholar に入力し、再度検索を行った。その結果、表4の No.2から No.4の論文3件を新たに抽出した。

表4は、先天性の肢体不自由（脳性麻痺）の当事者における障害受容の先行研究を7つの観点から整理し、表示した。No.1²⁰⁾の論文は、「軽度」肢体障害者における障害の意味づけについて、生涯発達の観点から検討することを目的として、脳性麻痺者3名（26歳～35歳）を対象に半構造化面接を行い、各ライフストーリーを時間枠から分析したものであった。その結果、自己と障害との関係の変化プロセスが語られ、「障害を常態視」→「脱価値的な体験への対処」→「障害を自己の中心に位置づける」というものであった。また、対象者は、障害の種類や程度に基づきながら、障害を持つ他者と同類意識を持っていたことがわかった。

No.2⁴⁰⁾と No.3⁵²⁾の論文は、言語障害などをはじめとする自己の障害認識について明らかにすることを目的として、アテトーゼ型脳性麻痺者18名（25歳～59歳）を対象にインタビュー調査を行い、得られたデータを質的に分析したものであった。その結果、本研究の対象者は、3,4歳時に「歩くことができない」という点や兄弟姉妹との発達の比較で自己の障害に気づき、年齢を重ねる中で言語障害や運動機能障害を客観的に認識したうえで受容し、日常生活では、様々な困難はあるが工夫しつつ、真摯に向き合い努力している姿勢が見られた。

No.4⁵³⁾の論文は、読書を用いた支援を通じて、対象児にどのような心理的変容がみられるかについて検討することを目的とし、アテトーゼ型脳性麻痺児1名（9歳）を対象に、エピソード記録から心理的変容過程を分析したものであった。その結果、移動機能障害を抱えている自分を受け入れることができなかった対象児が、読書を通じたかわりを継続することで、他者と比べながら自分のよいところを見つけることができるようになり、さらに他者と比較せずに自分なりによさを見つけられるように変容したことが分かった。

4. 考察

4.1 各年代における各障害種等の論文数について

障害のある当事者の障害受容に関する研究は、1999年以前に見られなかったが、2000年以降に多様な障害種に広がり、総数も増加していた。これは、2007年の特別支援教育の開始などに加えて、2001年から当事者研究が開始されたことが一つの要因と考えられる。当事者研究とは、精神障害をかかえた当

事者の地域活動拠点である北海道浦河町の「浦河べてるの家（以下、べてる）」で生まれたもので、仲間と共に自分の苦勞の特徴を語り合う中で、自らの症状における苦勞の規則性や自己対処方法などを研究・実践していくものである⁵⁴⁾。現在では ASD の当事者研究がさかんに行われている。このように障害のある当事者本人が自身の障害を見つめ、同じ障害のある者同士で語り合う中で自己対処方法を見つけしていく取り組みは、本研究の目的である「自己の障害に対する心理過程を明らかにすること」に類似性があるといえる。先天性脳性麻痺者であり当事者研究の研究者でもある熊谷は、マイノリティが研究に参加する意味として、教育や研究現場のバリアフリー化が、学知にとって最も重要な条件である客観性を徹底するうえで、なくてはならない要素であると述べている⁵⁵⁾。つまり、当事者研究は、今まで当事者の語りを専門家が解釈してきた研究領域に、当事者自身が参加することで主観のありようにも、客観のありようにも、多様性を認めることにつながるといえる。今後は、当事者研究も含めて、レビューを行う必要があると考えられる。

4.2 事故や病気など後天性の障害の当事者における障害受容について

後天性の肢体不自由（脳卒中など）の当事者における障害受容の論文では、Cohn の障害受容論⁵⁶⁾や上田の障害受容の5段階説⁵⁷⁾などの従来の障害受容論が適応できる結果となった。上田⁵⁷⁾は、障害受容の5段階説を提唱し、第1段階がショック期、第2段階が否認期（「怒り・うらみ」と「悲嘆・抑うつ」）、第3段階が混乱期、第4段階が解決への努力期、第5段階が受容期で、リハビリテーションを受ける患者さんの障害受容に至る複雑な心理状態をよく理解することが適切な支援の基本であると述べている。これらのことから、後天性の障害の当事者に対して支援・指導する際には、障害受容の心理過程の状態の把握や段階に応じた関わりが重要であるといえる。また、自身の障害を受容するまでには、多くの時間が必要であることも先行研究^{3,21)}から分かった。さらに、田垣³⁾や松本と泉²³⁾、盛田と阿部²⁴⁾、北尾ら²⁷⁾、喜多ら²⁹⁾、金原と笹田³⁴⁾では、「他者との関わり」の重要性を指摘している。中でも、同じ障害を持つ当事者同士の関わりの中での気づきが、「自己」を見つめる際にポジティブな変化につながった事例³⁴⁾は、重要な示唆であるといえる。同じ障害を持つ当事者同士の関わりを意図的に設ける取り組みは、教育現場だけでなく、医療現場でも活用できると考えられ、今後の研究実践に期待したい。

4.3 先天性の肢体不自由（脳性麻痺）の当事者における障害受容について

本研究の検索キーワードでは、先天性の肢体不自由の当事者における障害受容に関する論文は田垣²⁰⁾の1件のみであった。そのため、検索条件を変えて再度論文抽出を行うことで4件となった。この結果から、先天性の肢体不自由の当事者における障害受容に関する研究は、後天性の肢体不自由の当事者における障害受容に関する研究と比べて、非常に少ないことが明らかとなった。また、障害受容の過程では、自己の障害に気づいた時期は、3, 4歳が多く、気づきのきっかけは、「歩くことができない」という点であった。彼らは、受傷したことで親を恨んではいないと述べ、原因を究明しても障害が治るわけでないことも自覚しており、障害を受け入れ、従っていかざるを得ないと考える、半面で、前向きに生きようという意欲も旺盛であった。つまり、生

まれた時から障害を持っているために、障害への気づきが低年齢であり、障害を常態視していることが分かった。このことから、従来の障害受容論では説明のつかない、独自の障害受容過程があると示唆される。また、進学や就職などの変化の際に、自分と他者の違いを感じたケースが複数見られた。そのような場合でも、自分の障害を客観的に認識したうえで受容し、様々な困難に対して対処行動を積極的にとっている様子が分かった。これらのことから、先天性の脳性麻痺などの障害受容過程をさらに調査し、その時々々の困難の対処方法や支援者のよりよい関わりについて明らかにすることこそ、今の時代に求められているといえる。更に、先天性の脳性麻痺者自身が仲間と共に語り合う中で自己対処方法をみつけていく、当事者研究の取り組みも求められており、今後の研究の発展に期待したい。

謝 辞

本研究は令和5年度医療福祉研究費の助成を受けたものです。

文 献

- 1) 高野陽介, 泉真由子: 医療的ケア児の保護者に対する学校生活のサポートに関する実態調査. 療育, 71, 9-19, 2022.
- 2) 生田邦紘, 赤木和重: 軽度知的障害のある青年における障害受容の変容プロセス—「ふつう」にこだわっていた青年は、なぜ「ふつう」にこだわらなくなったのか—. 心理学, 42, 90-111, 2021.
- 3) 田垣正晋: 中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか—脊髄損傷者のライフストーリーより—. 社会心理学研究, 19, 159-174, 2004.
- 4) 橋本美香: 中高齢の中途視覚障害者の生活適応における体験の構造—「あきらめ」から積極的社会参加へ転ずるプロセス—. 社会福祉学, 59, 109-122, 2018.
- 5) Drotar D, Baskiewicz A, Irvin N, Kennell J and Klaus M: The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A hypothetical model. *Pediatrics*, 56, 710-717, 1975.
- 6) 中田洋二郎: 親の障害認識と受容に関する考察—受容の段階説と慢性的悲哀—. 早稲田心理学年報, 27, 83-92, 1995.
- 7) 平田正吾, 奥住秀之, 北島善夫, 細渕富夫, 国分充: 脳性麻痺の疫学についての研究動向—近年のHagbergらの調査についての文献検討—. 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 39-43, 2013.
- 8) 田巻義孝, 加藤美朗, 堀田千絵, 宮地弘一郎: 脳性麻痺(1): 肢体不自由, 脳性麻痺の定義と関連事項. 信州大学教育学部研究論集, 9, 227-248, 2016.
- 9) 篠田達明: 肢体不自由児の医療・療育・教育. 金芳堂, 東京, 2015.
- 10) 鈴木真知子, 池田浩明, 広川律子: 言語障害を伴う脳性麻痺者の長期予後に関する研究(1)—言語機能と障害認識の面から—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 7, 67-75, 2012.
- 11) 長谷川大也, 米田宏樹: 通常学級における障害児支援・配慮の現状と課題—成人障害当事者に対する懐古的分析をもとに—. 障害科学研究, 46, 163-174, 2022.
- 12) 柏倉秀克: 障害者地域生活支援センターにおける“ピア・サポート”に関する一考察—名古屋市 M 区障害者地域生活支援センターの中途視覚障害者相談記録の調査分析から—. 社会福祉学, 46, 86-95, 2005.
- 13) 坪田光平, 安房竜矢, 駿河厚希: 中途視覚障害者の白杖利用プロセスと分岐要因—ライフコースにおける「重要な他者」に注目して—. 職業能力開発研究誌, 33, 1-10, 2017.
- 14) 橋本美香: 中高齢の中途視覚障害者の生活適応における体験の構造—「あきらめ」から積極的社会参加へ転ずるプロセス—. 社会福祉学, 59, 109-122, 2018.

- 15) 荒木友希子：障害のある子が育つということ—幼児期に人工内耳埋め込み手術を施行した聴覚障害児の事例から考える—。子育て研究, 4, 20-31, 2014.
- 16) 荒木友希子, 新井瑠夏：幼児期に人工内耳埋め込み手術を施行した聴覚障害児のアイデンティティ形成について。心理学の諸領域, 6, 49-59, 2017.
- 17) 岡野由実, 廣田栄子：一側性難聴者における難聴の自覚と障害認識の経緯に関する検討。AUDIOLOGY JAPAN, 57, 373-374, 2014.
- 18) 岡野由実, 廣田栄子：一側性難聴事例における聞こえの障害と障害認識の経緯に関する検討。AUDIOLOGY JAPAN, 58, 648-659, 2015.
- 19) 勝谷紀子：難聴者が自身の難聴およびストレスについて理解を深めるためのプログラム作成の試み：ストレス対処ワークショップ。特殊教育学研究, 56, 305-314, 2019.
- 20) 田垣正晋：生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味—重度肢体障害者と健常者との狭間のライフストーリーより—。質的心理学研究, 1, 36-54, 2002.
- 21) 笹原千穂：脳血管障害をもつ壮年期の人々の在宅生活に関わる願望の内容。日本地域看護学会誌, 8, 24-30, 2005.
- 22) 田垣正晋：障害の意味の長期的変化と短期的変化の比較研究—脊髄損傷者のライフストーリーより—。質的心理学研究, 5, 70-98, 2006.
- 23) 松本浩子, 泉キヨ子：脊髄損傷患者の急性期における体験。日本看護研究学会雑誌, 30, 77-85, 2007.
- 24) 盛田祐司, 阿部真里子：中途身体障害者の心理的回復過程におけるライフストーリー研究—個人的・社会的側面による仮説的モデル生成の試み—。質的心理学研究, 6, 98-120, 2007.
- 25) 井出(大河内)彩子, 藤村一美：頸髄損傷者が経験する社会とのかかわりにおいてもたらされる苦しみと共生を目指す過程に関する検討。日本地域看護学会誌, 15, 12-22, 2013.
- 26) 井出(大河内)彩子, 山崎喜比古, 藤村一美, 楠永敏恵：外傷性在宅頸髄損傷者の個人誌の混乱にみる困難の特徴と概念構造の検討。民族衛生, 79, 26-46, 2013.
- 27) 北尾良太, 鈴木純恵, 土井香, 清水安子：回復期リハビリテーション脳卒中者が語る病い経験に関する研究—医療者とのかかわりから“あとから病いがわかっていく”こと—。日本看護研究学会雑誌, 36, 123-133, 2013.
- 28) 林真帆：ソーシャルワークにおける高次脳機能障害のある人の対象認識に関する研究—＜受容なきままの覚悟＞をもって生きる存在—。総合病院精神医学, 30, 107-112, 2018.
- 29) 喜多一馬, 池田耕二, 仲渡一美：理学療法を積極的に取り組んでいる障がい者有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探索する。保健医療学雑誌, 10, 79-91, 2019.
- 30) 北村新, 宮本礼子：脳卒中片麻痺者が生活のなかで麻痺手の使用・不使用にいたる過程。作業療法, 38, 45-53, 2019.
- 31) 志戸岡恵子, 内藤直子：慢性期脊髄損傷者の排便形態と便失禁の有無が自尊感情と自己効力感に与える影響。日本看護技術学会誌, 18, 26-35, 2019.
- 32) 関啓子：私の障害受容—発症10年目を過ぎた脳卒中当事者として今思うこと—。The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 57, 920-929, 2020.
- 33) 佐久間桃子, 小澤温：頸髄損傷者の社会との関わり合いを形成するプロセス—ソーシャルメディアに焦点をあてて—。リハビリテーション連携科学, 22, 12-22, 2021.
- 34) 金原衣理子, 笹田哲：脳卒中により半身麻痺となった女性がファッションショーを通して障害の捉え方が変化していく心理プロセス。質的心理学研究, 22, 369-387, 2023.
- 35) 半田美織, 日下和代, 叶谷由佳, 佐藤千史：デイケアに通所する精神障害者の生活満足感に関する研究。日本看護科学学会誌, 23, 20-30, 2004.
- 36) 齋藤征人：雑誌『爽風』考 精神障害者らが「仲間」に語りかけたもの。帯広大谷短期大学紀要, 46, 11-16, 2009.
- 37) 池谷彩：他者との関係の中で生成する「精神障害」経験と自己のありよう—精神障害者地域作業所での聞き取りから—。質的心理学研究, 12, 82-99, 2013.
- 38) 御旅屋達：若者支援における「障害」の位置。教育社会学研究, 101, 131-150, 2017.
- 39) 瀬戸口ひとみ, 糸嶺一郎：統合失調症者の病いとの「折り合い」に関する研究の動向。日本農村医学会雑誌, 65, 917-923, 2017.
- 40) 瀬戸口ひとみ, 糸嶺一郎, 朝倉千比呂, 鈴木英子：統合失調症者の病いとの「折り合い」の概念分析。日本保健福祉学会誌, 23, 35-45, 2017.
- 41) 瀬戸口ひとみ, 糸嶺一郎, 町田貴絵, 鈴木英子：地域で生活する統合失調症者の病いとの「折り合い」のつけ方—テキストマイニング分析を用いて—。日本健康医学会雑誌, 27, 266-273, 2018.

- 42) 前原和明：精神障害当事者における「自己理解の支援」の意味についての探索的研究—テキストマイニングによる統合的分析—. *Total Rehabilitation Research*, 7, 22-33, 2019.
- 43) 平野郁子：自閉スペクトラム症のある人とともに自己理解を経験する対話実践. 自閉症スペクトラム研究, 20, 81-89, 2022.
- 44) 隅田好美：「病いとともにその人らしく生きる」ための病いの意味づけ—筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者への質的調査を通して—. 社会福祉学, 51, 53-65, 2010.
- 45) 辻慶子, 間瀬由記, 寺崎明美：喉頭摘出者におけるライフスタイル再編成の過程—食道発声教室参加まもない参加者を対象に—. 日本看護研究学会雑誌, 31, 83-95, 2008.
- 46) 間瀬由記, 寺崎明美, 辻慶子：喉頭摘出者の食道発声法訓練継続に関する自己決定行動の分析. 日本がん看護学会誌, 23, 42-49, 2009.
- 47) 能智正博：ある失語症患者における“場の意味”の変遷—語られざるストーリーを追いながら—. 質的心理学研究, 5, 48-69, 2006.
- 48) 吉畑博代：失語症がある人のコミュニケーション力を高めるために—患者報告アウトカム測定ツール JAIQ-21の試用結果—. 高次脳機能研究（旧 失語症研究）, 38, 177-183, 2018.
- 49) 工藤有希：在宅酸素療法を受けながら社会生活を営む人の体験. 日本赤十字看護学会誌, 23, 115-124, 2022.
- 50) 岡本佳奈, 石田賢哉：社会的な活動を行っている膠原病患者はどのように病気と共にある人生を捉え直してきたか—ナラティブ分析による試み—. 日本ヒューマンケア科学会誌, 16, 1-15, 2023.
- 51) 松田なつみ：トウレット症候群のチックへの自己対処の機能と対処の生じる文脈—半随意的な症状にいかに対処していくのか—. 発達心理学研究, 24, 250-262, 2013.
- 52) 鈴木真知子, 広川律子：言語障害を伴う脳性麻痺者の長期予後に関する研究(2)—言語機能と障害認識の面から—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 8, 67-76, 2013.
- 53) 小西一博：自己受容に悩むアトピー型脳性麻痺児に対する読書を通じたかかわりに関する事例研究. 教育カウンセリング研究, 10, 11-18, 2020.
- 54) 綾屋紗月：当事者研究の新たな歴史を紡ぐ. 科学技術社会論研究, 18, 74-86, 2020.
- 55) 熊谷晋一郎：マイノリティが研究に参加する意味. 科学と教育, 64, 276-279, 2016.
- 56) Cohn N：Understanding the process of adjustment to disability. *Journal of Rehabilitation*, 27, 16-18, 1961.
- 57) 上田敏：障害の受容—その本質と諸段階について—. 総合リハビリテーション, 8, 512-521, 1980.

(2024年4月30日受理)

Research Trends and Prospects of Psychological Processes of Persons with Congenital Cerebral Palsy Regarding Their Own Disability

Hiroaki NISHIDA, Aya YUASA and Yuko TAKEI

(Accepted Apr. 30, 2024)

Key words : acceptance of own disability by persons with disabilities, review, congenital cerebral palsy

Abstract

The purpose of this study was twofold: first, to review previous studies on “disability acceptance” and “disability perception” among persons with disabilities and to summarize them by disability type; second, to clarify how “persons with acquired disabilities due to accidents or illnesses that resulted in physical disabilities” and “congenital cerebral palsy” have accepted their own disabilities during their lives. A search of J-STAGE using the keywords “parties with disabilities”, “acceptance of disabilities”, resulted in the extraction of 43 articles. Since 2000, research on disability acceptance among persons with disabilities has spread to a variety of disability types, and the total number of articles has increased significantly. We also found that the number of papers on disability acceptance by persons with congenital disabilities was smaller than that of papers on disability acceptance by persons with acquired disabilities due to accidents or illnesses that resulted in limb disabilities. Furthermore, the results of disability acceptance in the acquired limb disabled persons showed that the conventional disability acceptance theory of Cohn, Ueda, and others could be applied, but the congenital cerebral palsy persons regarded their disability as normal. In other words, the results suggest that congenital cerebral palsy patients have their own unique disability acceptance process, which cannot be explained by the conventional disability acceptance theory.

Correspondence to : Hiroaki NISHIDA

Department of Health and Sports Science
Faculty of Health Science and Technology
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : nishida@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.34, No.1, 2024 9 – 21)